

# こちら特報

## 検証

### 台風19号で

### ハツ場ダム

### スーパー堤防

# 本当に役立った？

「ハツ場ダムを含めた上流のダム群、渡良瀬遊水地で洪水を貯留したことが大きな原因と分析している」

十六日の参院予算委員会。赤羽一嘉国土交通相は、利根川沿いで大きな被害がなかった理由をこう述べた。安倍晋三首相もハツ場ダムに触れ「財政的な負担は何世代にもわたり対応していかなければならないが後世の人たちの命を救うことにもなる」と強調した。

ツイッターでは「(ハツ場ダムが)都内や関東を守ってくれた」「洪水、氾濫、守ってくれたのは、荒川スーパー堤防」といった称賛が相次いだ。なかには「民主党政権時代に事業仕分けとやらのパフォーマンスで、スーパー堤防反対されたよね」など旧民主党政権の批判もあった。

実際は、どうだったか。国交省関東地方整備局ハツ場ダム工事事務所によると、今月一日から試験的に貯水していたが、十一日午前二時～十三日午前五時に水位は標高約五一八センチから同五七三センチまで急上昇。十

政負担があっても、後世の人たちを救うことになる」と、巨大治水事業の意義を強調した。だが、本当にハツ場ダムやスーパー堤防は、今回の洪水被害を抑える上で役に立ったのだろうか。検証してみた。

(中山岳、石井紀代美)

五日午後六時ごろに常時満水位の同五八三センチ、貯水率100%になった。スーパー堤防はどうか。荒川下流河川事務所によると、十三日午前八時に岩淵水門(東京都北区)で氾濫危険水位にあと約五〇センチまで迫った。荒川下流部は江戸川区や江東区などに整備中も



ハツ場ダム工事現場 左岸見放台  
台風19号の影響で、ほぼ満水になったハツ場ダム  
＝国土交通省関東地方整備局ホームページより

含めて総延長七、五キロのスーパー堤防があるが、決壊などの被害はなかった。

こうした経緯から「効果があった」と語られがちだが、そつしたストーリーは本当か。

まずハツ場ダム。市民団体「水源開発問題全国連絡会(水源連)」の嶋津暉之共同代表は「ダムが無くて利根川本川の中流や下流の水位はそれほど上昇しなかった」と指摘する。

国交省の「水文水質データベース」によると、利根川の栗橋観測所(埼玉県)の最高水位は十三日午前三時すぎに九・六七メートルを記録。だが嶋津氏によれば、堤防整備の際に川の水が流れても耐えられる目安にする「計画高水位」(九・九センチ)より低かった。

今回の台風19号で、栗橋地点の流量は分かっていたのだが、嶋津氏は過去八年の栗橋地点の流量データを

## ネット称賛 ■ 首相は意義強調「後世の人救う」

ら、ピーク時は毎秒約一万一千七百立方メートルと算出。国交省の資料を基にさらに分析し水位を割り出したところ、ハツ場ダムがなかった場合、水位は約十七センチ上昇したと推定した。

「仮に水位が十七センチがあっても計画高水位より低い。実際の堤防の高さは、計画高水位よりさらに約二センチ高く、氾濫したとは考えられない」

一方、嶋津氏は利根川中流の河床の掘削が不十分で、国が目標とする流量を保てていない点を問題視する。「国の河川整備計画に沿って河床を掘削していれば、ピーク時の水位を七十分ほど下げられたと計算できる。限定的なハツ場ダムの治水効果に期待するより、計画通り河川を整備することの方が重要だ」

ハツ場ダムは、国が一九五二年に調査を開始して以降、地元住民らの反対で長く整備が進まなかった。二〇〇九年に建設費用が巨額すぎるなどとして、当時の民主党政権が建設中止を表明したが、一一年に撤回。自公政権下で一五年一月に着工していた。今回、久々に脚光を浴びた格好だ。

(第3種郵便物認可)

# こちら特報部

水源連事務局の西島和弁護士は、ハツ場ダムが試験的な貯水をしてきたため、豪雨前の貯水量は最低水位より低かった点を挙げ「本格的に運用されればためられる水量はより少なくなる」と指摘。本格運用後に今回のような豪雨が降れば、緊急放流された可能性もあったとみる。「ダム治水効果は降雨の場所、雨量、降り方が想定内に収まらない限り、見込めない。運用で放流のタイミングを間違えれば下流域に被害が出る恐れすらある」と話す。

一方のスーパー堤防。今回の台風では多摩川、荒川下流域で堤防の決壊は免れた。効果はあったのか。

国土交通省治水課の石田和也課長補佐は「現在、多少なりとも整備が進んでいる場所では、越水などのシビアな状況には遭遇しなかった。現時点で効果は分からない」とする。

そもそもスーパー堤防は純粋な治水事業とはいえない。一九八〇年代になって都市部の開発工事が出た大量の残土の行き場がなくなり、処理する場所が足りなくなる中で発案された。堤防の住宅地側をこの残土でかさ上げして、堤防と一体化して厚みを出すことで、その平らな広い堤防の上を街として再開発するといっ



2010年10月、多摩川の堤防(後方)沿いで、スーパー堤防の整備予定地区を視察する連舩行政刷新担当時、東京都大田区下丸子で、スーパー堤防が整備されている大島小松川公園。東京都江東区で、本社へリポートする。

## ハツ場 「水位17%下げただけ」 緊急放流で被害の可能性も

実際は

堤防

現時点で効果分からず 「壊れない」はウソ

構想だ。

バブル経済だった一九八七年に事業が始まり、関東と近畿の六河川で計八百七十二キロを整備する計画だった。総工費十二兆円、実際の進捗率を当てはめると完成は二千二百年後というところもない計画のため、旧民主党政権は二〇一〇年の事業仕分けで「スーパー無駄遣いだ」として「廃止」にした。だが、自民党に政権交代後の一三年、江戸川、荒川、多摩川などの五河川計百二十キロに規模を縮小し、復活した。

「現在完成しているのは三・四%(2.8%)。地域の再開発などの計画に合わせて整備するため、事業費も完成時期のめども公的な数字はない」と石田氏。国交省の利根川・江戸川有

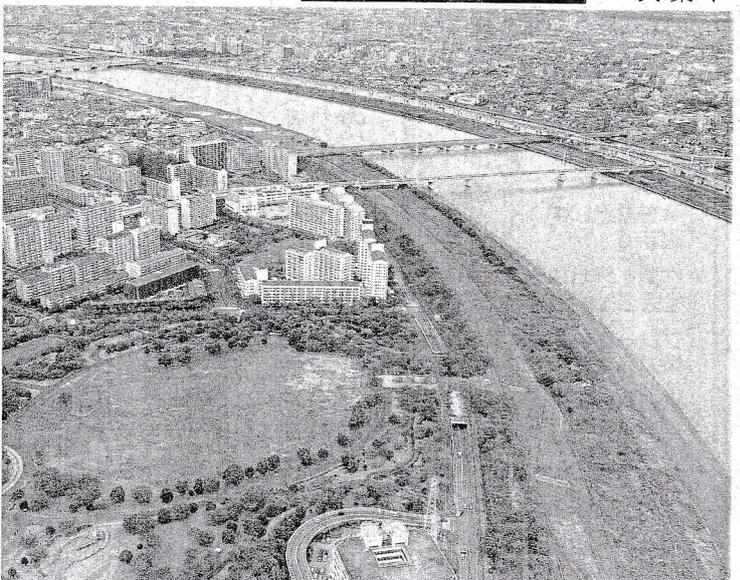
識者会議の委員を務めた関良基・拓殖大教授(環境政策)は「川沿いの住民の立ち退き料などがかさみ、試算では江戸川の二十二キロで約一兆円かかる。完成するのも百年以上先。あまりに非現実的だ」と批判する。

そもそも、スーパー堤防が本場に洪水に強いのかにも疑問符がつく。元国立土木研究所次長の石崎勝義氏は「スーパー堤防は越水しても壊れないことになって

いるが、それはウソ。結果として草や木が局、ちよっとした草や木が生えている所から水で削り取られ、アスファルトが破壊されていく」と指摘する。

ネットでの称賛とは裏腹に、ハツ場ダムもスーパー堤防も、どうやら洪水対策としてはあまり役に立っていないとすればよいのか。

京都大名誉教授の今本博健氏(河川工学)は堤防のてっぺんから鋼の矢板を真下に打ち込んで補強する手法を挙げる。「頑丈で、まず決壊しない。短期間で簡



# 巨大事業に頼らず すぐ対策を

単にできるし景観も壊さない。費用も百分の一以下だ」と勧める。

一方、前出の石崎氏は土木研究所などが過去に開発した技術で、堤防を遮水シートで覆って浸食を防ぐ「アーモリーヒー」という工法を「安価かつ効果が高い工法だ」と導入を提唱する。だが、国交省は後ろ向きだという。「国交省の予算は大きく、『社会保障費に回せ』という圧力は高い。でも、堤防が決壊すれば、それをね返して予算を確保することができる。

国交省の役人は今回のように決壊するのは都合がいいと思っているんです」と皮肉った上で、こう語る。

「いつまでも実効性のないダムやスーパー堤防にすがっているのは、今後もっと甚大な被害を巻き起こす。今すぐ本場の治水対策事業に転換すべきだ」

近年、毎年のように襲ってくるあまりにも巨大な台風や大雨の猛威を前にして、人々の間には、ダムやスーパー堤防など巨大な治水事業によって防いでほしいという、願望めいた思いもあるのかもしれない。ただ、実際にはそんな都合の良い最終兵器などは、やはり存在しないのだ。(歩)

「アスノメモ」